

19

天津における宇良田唯子の足跡

三崎 裕子

埼玉県所沢市

宇良田唯子は、日本人女性で初めてドイツの医学博士号を取得した人物である。彼女は1873（明治6）年に現在の熊本県天草市牛深町で、代々土地の資産家として有名な一家に生まれた。熊本薬学校を1892（明治25）年に卒業した後、上京し私立医学学校済生学舎に入学、1898（明治31）年に医術開業試験に合格し、翌年6月に医籍登録された。彼女は一時郷里で開業したこともあったが、同郷の北里柴三郎が主宰する伝染病研究所で2年間研鑽を積んだ後、1903（明治36）年、北里と緊密な関係のあったペーリングの居るマールブルク大学に留学した。そして1905（明治38）年2月に学位論文を提出、審査に合格して医学博士となった。同年6月に唯子はドイツから帰国し、日本人女性初の「ドクトル・メディツィーネ」として評判となった。唯子は日本においても学位を請求したが、それは却下され、東京で開業して診療活動を再開した。

そのような中、1907（明治40）年、唯子は恩師北里柴三郎の紹介で知り合った伝染病研究所の薬剤師中村常三郎と結婚し、中国天津に渡り日本租界で同仁医院を経営した。薬剤師の夫は病院内に薬局を経営し、同時に印刷所も経営していた。同仁医院は、日本人のみならず中国人に対しても間口を開き、中国人の患者も多かったと言われている。唯子は天津の地で20年に亘り診療活動を続けてきたが、日本の中国大陸侵略の激化により、病院の一部が日本軍の駐屯部隊に接収され、ともに病院経営をしてきた夫が病死したこともあり、1933（昭和8）年に日本に帰国、1936（昭和11）年に死去した。

天津の同仁医院がどのような状況であったのか、残された資料も少なくその状況を知ることは難しいが、今回、わずかに残された資料からその姿を確認してみた。まず、当時の天津の新聞『大公報』に掲載された同仁医院の広告から、いくつかの新たな事実がわかった。それは同仁医院が当初設立されたのは天津日本租界の東馬路だったが、1914年（大正3）年に場所を新壽街に移転して規模を拡大していたことである。新壽街の三階建ての病院の写真が残されているが、それは移転後のものであることがわかった。さらに広告では院長の唯子の他に2名の女医の名が記されていることも注目される。これは、同仁医院が女性の診療に留意していたことの表れであろう。

また外務省通商部の資料、1919（大正8）年と1924（大正13）年に同仁医院の名前が見え、1919（大正8）年の資料には「開設年月 大正3年7月、医師及び職員 院長中村唯子外1名、看護婦1名、産婆看護婦1名、患者数 日本人男1059人、女1145人、支那人男1135人、女1265人、其他外国人男20人、女35人」とある。新聞広告からすると、この開設年月よりも早く同仁医院は開設されていたので、これは新壽街の新しい病院の正式な開設時期と考えられる。

天津での唯子と夫、中村常三郎の活動は、日本居留民団の記録集である『天津日本租界居留民団資料』（陸行素著：広西師範大学出版社 2006）に、いくつかの事跡が残されている。中村常三郎の名の初出は1912（明治45）年で、書籍を寄付し、1924（大正13）年から1926（大正15）年にかけては居留民会の議員として会議に出席していることがわかる。また1924（大正13）年には議員として中村唯子の名前も見えている。また1931（昭和6）年には唯子が天津日本高等女学校に「銀五拾弗」と「山水掛軸」を寄付したことが記されている。翌、1932（昭和7）年には中村常三郎が天津日本図書館に275冊の本を寄贈したという記録もある。これは夫の死去にあたりその蔵書を唯子が寄贈したものであろう。

宇良田唯子はドイツにおける学位取得のみならず、天津における活動においても明治女医史の中で注目される人物といえよう。